

浄土

三月号



法然上人鑽仰会

昭和十年五月廿日 第三種郵便物認可 (毎月一回一日発行)
昭和二十四年四月二十八日 逓信省 (特別送來品雜誌) 第三五二号
昭和四十三年二月二十五日 発行
昭和四十四年三月一日 発行

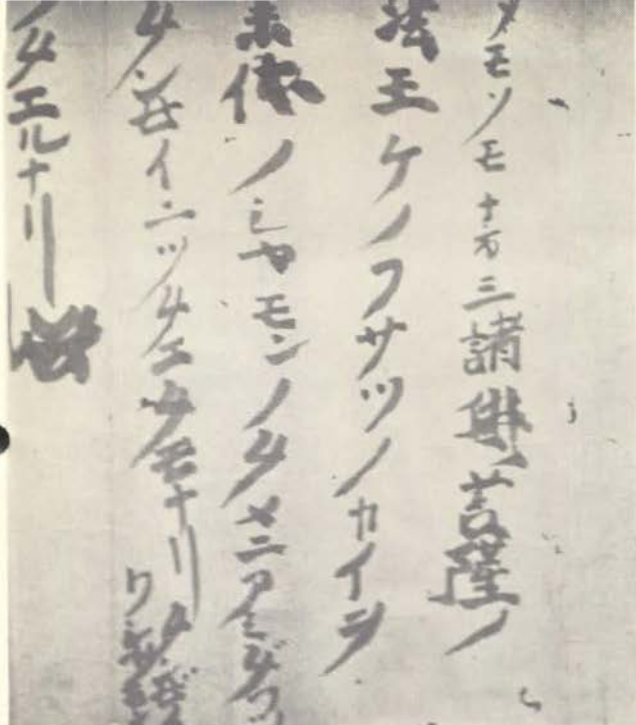
第三十四

第三号

粹のない字

彈誓筆布薩戒血脈袖書

京都古知谷阿弥陀寺所藏



京都から敦賀街道を北上。雅優なたたずまいをみせる八瀬・大原の里を過ぎると急に道路が悪くなる。大原川の清流を愛でながら車に揺られること十数分、森の葉陰に山門が見える。ここから西方に急な山坂を一キロ、苔むした細い岩道に杉の木立が美しい。夏でもひんやりする山中の平地に素朴な本堂、庫裡がある。近世初期の名僧彈誓が修行した阿弥陀寺はここ。

彈誓は木綿の衣に鉄の足駄、鉄の杖をもって諸国を行脚、念仏の修行と布教に専心。常食は抹香に松の甘皮を合せ石臼でついたものを丸めてすましたという。晩年は古知谷で教化、この地で入寂。現在ミイラとなって洞窟内の石棺に安置されている。

髪も髭ものびるにまかせ、深山にこもって荒行を続ける彼にあった仙人や狩人は、鬼神かお化けと思ひ判断に苦しんだが、十念を授けられて敬服、その後話を聞いて参集するもので市をなしたという。

彈誓は厳しい修行の結果、自信をもって布薩戒を弟子に授けていった。写真はその袖書である。彼にとっては脱字があろうと誤字があろうと、文章がどうであらうと問題になかった。要はその実践にあった。一旦幼稚にみえるが、ここには何物にもとらわれない、しかも異常なまでの自信がにじみ出て、味わえは味わうほどあきない字である。再度この通りに書こうとしても書けない字である。

— 目 次 —

表紙「天人」松濤達文画

彼岸のころ—西山のみち……戸川靈俊…(2)

お歌をいただく……………(5)

二祖三代のあゆみ

……………三枝樹隆善…(6)

闇 の 鉦……………榊 泰純…(9)

アメリカに於ける開教師を終えて

……………伊藤正穂…(12)

紹介「五重大会勸誡講録」……………(15)

四苦八苦⑦息子の出家

……………渋谷賢応…(16)

布教コンサルタント②自分を愛せ……………(18)

日々これ好日……………小川 金英…(20)

仏像の心を開く……………一ノ瀬 路夫…(22)

和訳三部経⑥菩薩のあるべき姿

……………村瀬秀雄…(24)

児童劇 ピーターとおおかみ……………(28)

逢仏法捨身命といへる事を

かりそめの色のゆかりの恋だにも

あふには身をもおしみやはする

法
然
上
人
御
歌



彼岸のころ

西山のみち

戸川 靈 俊

二月堂のお水取りも済む頃には、北山の山なみの白銀に光る雪も次第にうすれ、冬のあいだ底冷えに深沈と静もつていた京の町にも、ようやく春が訪れてきます。

暑い寒いも彼岸まで

いつも彼岸ころになると想い起させるおきまりの句ですが、晩秋の北山しぐれに曇るころから、四囲が山々の湖底のような、痛いつめたさの覺の下で、暗い冬の間をようやく息づいてきた人々にとっては、まことに蘇える思いの實感をこめて味あわれる句でありましょう。あこがれの理想の世界——お浄土を恋い慕う心とは、実にこの素朴な春を待つ心でありましょう。仏教の諸々の行事の中で、春三月のお彼岸ほど、人間の明るい季節感にみちあふれたものはないと思われま

す。

各地の大小の寺々では、それぞれ同信相集い彼岸会がわが身の修養と祖先追恩のために営まれますが、私は今年の春の彼岸の一日を、宗祖法然上人にゆかりの深い、京都西山の地

に訪れたいと思っています。

洛西西山——詳しくは今京都市右京区大枝町——国道九号線が開通してからは、ひとしお閑寂さをとりもどした旧丹波街道。その街道を国道がよぎる中山のあたりを右に、鏑々と鳴る両側の竹籬の葉ずれの音を聞きながら沓掛という部落に出る。その部落を更らにこえて丘陵の山ふところに抱かれ眠ったような小さな塚原の里。

塚原——そこが、八百年の昔、宗祖法然上人のご教化を蒙って、そのご恩報謝の念仏講を今もなお、丹波路の冬ごもりから解き放たれた毎年の春彼岸に、営んでいるのです。

称念上人の開創になる草庵、そして称念上人の御名をそのままのお寺の住持から——昭和の中ごろまでは知恩院末で西山派の方が董されていたが、その後は浄土宗から西山派におゆずりし粟生野光明寺派になった——招かれて、去秋私はその地を探ねてまいりました。

ちょうど柿の頃で、流石、大枝町は京都でも有名な柿の産

地だけに、丘に登って見下す街道をはさんで両側の部落の真赤な柿のたわわな実りは、私の住む東山の辺りにはまたと見られぬ素晴らしい景観でした。

大枝町のうちでも塚原は、更にそれよりも、塚原の筈で昔から名が高い。筈の出る頃、その最初のをまづ宮中に献上する慣習は、今も尚伝えられています。塚原を中心に、京の西山沿いは洛西の景観に欠かせぬ美事な竹林がたらなっています。これは長岡京遷都とともに、大和から移ってきた豪族たちの奥津城の土盛りが崩れぬよう、竹の根が防ぐために竹が植えられたのが、後世の西山の竹林であり塚原筈であると云い伝えられています。

塚原という地名が示すように、この部落は塚の原と呼ばれるにふさわしく塚が殊に多かったのでしょう。

裏山の小径をたどると、ところどころに、萱やくぬぎの根っこにおおわれた古墳の石組を目にすることが出来ます。この頃の石ブームで盗掘もしきりのようですが、それでも一つは完全にその姿を残し、その巨岩の道をたどると、遙かに遠い古代が息吹いている、京の近郊のめずらしい風物でもあります。このような古墳が、開かれゆく宅地造成から免れて、この塚原の里に未だ七つか八つは残されておりましょうか。

この古墳のある小径は、南から北へ高い峰につづいていま

す。その峯を越えると松尾。さらに桂の苔寺で有名な西芳寺の裏山に出るといいます。この道を、塚原では「みねがどう」と呼ばれています。おそらく「峰が道」というのでしよう。そしてこの「峰が道」を八百年の古え宗祖法然上人が西山へ教化のみぎり、日に夜に辿られたその道と信じられています。まこと、素朴な里の人々にとって、いや、わたくしたちにとって、この「峯が道」こそ、わたくしたちの辿るべき祖聖の道ではないでしょうか。

塚原の里には、八百年の歴史の流れを超えて、今になお脈々として一つの伝承がたえられています。――

ある冬の日。宗祖法然上人は念仏弘通の行脚の途、一軒の農家の庭に托鉢に立たれた。その時、何のおもてなしもできないその家の老母は、ちょうど煮ていた黒豆を盛って上人に献げた。宗祖は、これを大層お喜びになったという。それから、これをしおに毎年の正月には、ご挨拶にその老母は、西ヶ岡に粟生野に、また太秦に、法然上人の草庵を訪れて、黒豆を献げるのがしきたりとなったという。――

この老母の家系は、今日も塚原を中心に洛西一帯の地に数多の支脈と栄えている藤岡姓を名乗る一門です。藤岡姓も、その先祖は、やはり、長岡京造営の折、大和から桓武帝にしがって山城に移ってきた名家の一つであるということだ

す。

西山の冬も寒い。宗祖ご命日の頃は尚寒い。

ようやく春の陽ざしのあたたかくなる三月のお彼岸を待ちかねて、そして竹林の手入れもすっかり完了して、あとは竹の子が土の下でかすかに胎動するのを待つばかりの心なごむお彼岸の一日を、当家につたわる法然上人の影像をまつり、念仏講を里の人々が相寄りつとめるのです。

思えば粟生野・大原野・大枝・松尾・桂・嵯峨・太秦へとこの西山をつらぬく一筋の道は、賀茂の河原屋から白河禅房へ・真葛原大谷の草庵・小松谷とつらなる東山べりの一筋の道とは異なる宗祖法然上人ご教化のまた別の一つの路線であつたでしょう。そして後年、嘉祿の法難の時に、門弟たちが宗祖のご遺骸を北叡の僧兵の兇悪の手からお守りして、難を逃れ避けたのも、この西山をつらぬく一筋の道であつたでしょう。

この道の一つの要めになるのが塚原の里であり、塚原の「峠が道」であると思います。この道は、宗祖のつよいご教化の道でしたから、教化された人々の集団が西山のひじりとして、僧であれ俗であれ、法然教団の中で特色ある信仰の集団を形成していったであろうことが想像されます。

塚原に今に残る土俗的信仰にもその片鱗をうかがうことが

できるようです。

宗祖法然上人以後には、捨世派の称念上人が念仏信仰に活を入れ、この西山ぞいに、塚原にも、その門弟による道場が形成されてゆきました。明治にいたるまでには鎮西か、西山かの後世宗団のいさかきもあつたようですが、宗祖上人思慕への念はそれが為にいささかもたじろいではおりません。

絶えて人影を見ず

時に幽禽の窺うあり

春雨し椿自ら落ち

秋風梟独り悲しむ

酷愛す物情の寂かなるを

斯地希くは屍を埋めむ

河上肇が嘗ての日、こよなく愛した「哲学の道」鹿ヶ谷のあたりを詠んだこの詩は、今日では、祖聖の道いまにのこる西山大枝塚原のあたりの環境にまことふさわしい思いがされるのです。

八百年の恩寵を偲び、春のよろこびをお彼岸に託し、至心に営まれるひなの念仏の集いに私も亦訪れて心からなる合掌を捧げたいと思います。

お歌をいただく



達仏法捨身命といへる事を

かりそめの色のゆかりの恋だにも

あふには身をおしみやはする

(勅修御伝第三十)

「かりそめ」は一時のこと、はかないことというのであって、ここでは限りあるこの世の身体を指しています。「色」は肉体的なこと、情欲のことをいいます。「ゆかり」は縁故のことで、上と下との関係をあらわします。「だに」は何々さえといって、まず軽いことを挙げて重いことを言外に知らせるのに

用います。「やは」のやは反語であり、はは更に意味を強める言葉です。そこでお歌の意味は

限りあるこの世の身体的情欲にかかわる恋のためにさえ、恋しい人に逢うためには、自分の身を惜んだりするであろうか。いや、はかない恋のためにすら、わが身を惜んだりしないではないか。まして永遠の生命である阿弥陀さまに逢うためには、わが身を惜んだりするわけではない。

ということになります。お歌の題に「仏法に逢って身命を捨つるといへる事を」とありますので、上人の烈々たる信仰心とそれに対する覚悟の程を、この世の恋にたとえて詠われたものであります。上人の烈々たる御信仰については他の御法語にもありますが、中でも著名なのは流刑のために京を発つ時のお詞であります。即ちいよいよ京を発つ時にお弟子たちは、しきりと表面上だけ念仏宣布を停止なされたらいかがですと勧めましたが、最後に西阿に向って上人は次のように仰せられました。「われたとひ死刑にをこなはるとも、この事

いはずばあるべからず」

御信仰のためには死を賭するというお覚悟であります。これ以上強い言葉は外にあるわけがありません。身命を捨てるといっても、自分の生命を軽く考えているわけでありません。「受け難き人身」を受けて、いまここに生活していることの尊さを痛切に意識するからこそ、一時も猶子ならぬご信仰が生れてくるのであって、それだけ信仰の喜びが大きいといわなくてはなりません。

「天にあふぎ地にふしてよろこぶべし、このたび弥陀の本願にあへる事を。行住坐臥にも報すべし。かのほとけの恩徳を」と申されています。

人間にとって情欲は捨てたくとも捨て得ないということ、そこに歎びも悲しみもあるということは、上人が凡夫という自覚に徹した姿の中にうかがわれています。従って信仰に燃える心を恋心にとえたとしても、少しの不自然さを感じません。それよりは阿弥陀さまを仰ぎ慕う心を「聖なる恋」とし、一時的のものでない「永遠の恋心」として詠われたもののように思います。

(M)



二祖三代の歩み

三枝樹隆 善



はじめに

表題について「伝記と信仰をまぜた平易な紹介を書くように」と、編集部の方から原稿の依頼をうけて、しばしとまどったのであります。何分、浅学非才の私には、偉大な宗教家の思想信仰を平易にまとめるということは、至難の業であり、またどういそ自信もないのであります。しかし、私としては、浄土宗の二祖三代といわれる偉大な人びとの思想信仰を、何とか平易に理解して置きたいと日頃思っておりまして、あえて筆を執ることにいたしました。そこで、今回より三回にわたって二祖三代の歩みについて書いて見たいと思います。

まずここで、二祖三代について説明しておかねばなりません。二祖とは、すなわち浄土宗で高祖と仰ぐ善導大師と宗祖

法然上人を指すのであり、三代とは、すなわち宗祖法然上人とその正統をうけ継がれた鎮西上人と、さらにその次の良忠上人を指しているのであります。

現代の浄土宗の教育は、宗祖法然上人を中心とする二祖三代の思想信仰が統合されて展開された教えであるということが出来ます。この意味においてとくに二祖三代の祖師の足跡を追慕して見ることは、まことに意義深いことであります。

一、二祖の対面

宗祖は或る日、次のような夢を見られました。それは、一つの大きな山があった。その峯はきわめて高く南北にながく連なつて西の方角に面していた。山のふもとには大河が流れ、その河原は広びろとして限りなく、林樹は茫々として果てしなく広がっていた。源空（宗祖）は、ただちに山の中

腹に登って遙かに西の方を見られた。地上より五十尺ばかりの空中にひとむらの紫雲が棚引いていたので、宗祖はどこかに往生人があったのではなからうかと思われた。すると、その紫の雲が自分の近くに飛んで来て、その中から無量の光りが放たれ、その光りの中から孔雀や鸚鵡などいろいろの鳥が飛来して河原で遊び戯れているのが見えた。これらの鳥をよく見れば、それは鳥ではなく光りが交錯していたのであった。しばらくすると、その衆鳥は飛び去ってもとの紫雲の中に入ってしまった。そうして紫雲は北の山のかたに消えて行った。このとき宗祖は思われた。また往生人があったのであろうかと。宗祖がこのように思われている間に紫雲がまた目の前に棚引いて、あたり一面を覆うてしまった。するとこんどは、その紫雲の中から墨染めの衣を着た一人の僧が現われた。宗祖はただちに歩みよって、僧の足もとから仰ぎ見れば、その僧の上半身は金色にかがやいていた。宗祖はこれに驚いて合掌礼拝して「あなたはどなたですか」と尋ねられた。するとその僧は「私は中国の善導というものであります」と答えられた。また宗祖が「何のために来られたのですか」と問われたのに対して、その僧は「あなたが専修念仏を弘められていることは、まことに貴いことです。それを証明するためにここへやって来たのです」と答えた。さらにまた

宗祖は「それでは念仏を専修する人は誰でも往生することができるのですか」と尋ねられたが、これに對する返事はなく、忽然として夢は覺めてしまった。

これは、宗祖法然上人が亡くなられてから比較的早い時期に成立したといわれる『夢感聖相記』の内容であります。この高祖と宗祖の対面についての物語は、法然上人の伝記である『勅修御伝』や『一期物語』『拾遺語燈錄』などにも記されております。

この夢物語は、時と処を異にした宗祖と高祖とを時間と空間の制約を越えた靈的感應によって対面せしめているのであります。これが、これこそ、宗祖法然上人の宗教的体験の深さを示すものであるといわなければなりません。これは歴史的事実としてはありえないことであっても、宗教的にはまったく真実として見ることであります。宗祖はたえず高祖すなわち善導大師を心から崇敬しておられましたから、始終、宗祖の脳裏には高祖善導大師の御姿が焼き付けられていたに違いありません。だから、夢の中に高祖の御姿が阿彌陀仏の化身として現われても何ら不思議なことではないのであります。

宗祖法然上人は、四十三歳のときに浄土宗を開かれたのでありますが、靈的感應によって高祖善導大師と対面されたの

は、これより少し前のことであります。宗祖は宗教的確信を得るために筆舌に尽し難い辛苦を詠められましたが、夢の中で高祖に對面されることによって、立教開宗の宗教的確信をいよいよ深められたのであります。

二、二祖の宗教的触れ合い

宗祖法然上人が強調せられましたことは、いうまでもなく『選択本願念仏』であります。この選択本願の念仏は、すなわち高祖善導大師が力説せられた「専称弥陀名号」の一行に歸せられるであります。しかしながら、高祖善導大師の念仏觀と宗祖法然上人のそれとは本質的には同一でなければなりません。宗祖法然上人が独自の立場から「念仏には助をもささぬなり」と述べて「勝」の義を明らかにせられているところに、高祖の主張をさらに展開せられた宗祖の宗教的卓見が窺われるのであります。インドから中国へそして中国から日本へという継がれた浄土教は、宗祖法然上人によってはじめて日本的に展開されたのでありますが、とくに宗祖はその主著『選択本願念仏集』の中において「偏に善導一師に依る」と述べられていることは、宗祖の宗教的立場を明確に示しているものであるといわなければなりません。

宗祖は、その最愛の弟子である勢観房源智の見聞によると

いわれる『一期物語』によりますと、恵心僧都の『往生要集』を先導として浄土門に入られ、高祖善導大師の『観經』の註釈書を三回読まれて、悩み苦しむ凡夫は称名の一行によって往生することができるという道理を体得せられたと伝えられております。このようにたとえ、称名の念仏によって決定往生の確信を得られたのは、まったく高祖善導大師の『観經流』の指南によるものであるといわなければなりません。

宗祖はその著『選択集』において、その大部分を浄土三部經と高祖善導大師の著述に基づいて、選択本願の念仏の意義を明らかにされているのであります。そうして宗祖はそのおわりに「静かにおもんみれば、善導の観經流はこれ西方の指南行者の目足なり。しからばすなわち西方の行人（念仏する人）かならずすべからず珍敬すべし。なかならず毎夜夢中に僧ありて玄義を指授す。僧は恐らくはこれ弥陀の応現ならん。しからばいふべし。この疏はこれ弥陀の伝説なりと。いかにいわんや、大唐に相伝していわく、善導はこれ弥陀の化身なりと。しからばいふべし。またこの文はこれ弥陀の直説なりと。すでに写さんと欲するものはもっぱら經法のごとくせよ」と述べられております。宗祖を阿弥陀仏の化身として拝されたのであります。

闇 の 鉦

榊

泰
純



「カーン カーン カーン」

黒い闇の中から鉦の音が聞え始めた。木々の下の方から響きだした。

「あれはどの辺だろう?」

「うん、最初だから、相性院のあたりじゃないかな?」

「そうすると、この奥の院は十二時過ぎになってしまっ
ね」

今夜はひえそうだ。まだ九時でこの状態だから、夜中には寒くなるぞ。

八月六日。ここ山形市外、山寺といわれる宝珠山立石寺の山中は、静まりかえっている。今晚の夜行念仏には、昨

年よりか参詣客は少なくなってしまった。年々先細りとなっているので、二、三年したら行われなくなってしまうのではなからうか。いろいろな理由はあるが、残しておいてもらいたい行事だと思ふのだが。この立石寺一山とは直接関係なく、寺院は信者のために開放され、山に行者が登って来るまで、夜食を食べたり、話したり、また民謡を唄い踊ったりして、待っている。その時が来るまで待っている。

動かない、重い空気の中を、時々、鉦の音だけが登って来る。

「ちょっと見てこようかな?」

「去年と同じ連中だろう」

やはり落ちつかない。石段のほんのわずかな白さをたよりに、おりて行く。自分の足音だけが、やけに大きく感じ、すぐスポンジの中のように吸い取られてしまう。おりの動作だけをしているよう。鉦の音ははっきりと聞えて来て、電燈に取り囲まれた二人の行者だけが浮き上っている。昨年の人たちだ。年寄った人と四十代の人と二人。以前は数多くの行者が登ったそう。寺々には、それを待ちうける信者があふれ、建物内はいっぱいで、庭にはむしろ敷いて、大変なにぎやかだったそう。しかし僕が録音に來てから三年ほどは、今、一心に回向文を詠っている二人だけ。笏を着、左手に金剛杖を、右手に扇子を持て詠っている。

あと金乗院、それから中性院。奥の院はそれからのので、まだまだ。行者の姿を見て、安心して、ほっとする。これもいつもの通り。

……山上の堂にのぼる。岩に巖を重ねて山とし、松柏年旧、土石老て苔滑に、岩上の院々扉を閉て物の音きこえず。岸をめぐり岩を這て仏閣を拝し、佳景寂莫として心すみ行のみおぼゆ。

まわりを見ても、濃い闇、淡い闇の中に、杉の太木やお

堂、山の形のみで、これとはっきりは見えない。芭蕉は夕方であるが今は夜中。静かさだけは昔と変らなからう。日中の観光地化した立石寺ではない。音をすべて吸収してしまふ山寺である。また、ゆっくりと登って行った。

十一時半頃、中性院下の石段が、ぼおっと明るくなつて、二人の行者が登って來た。

「今年もまたやって來ました。」

「お元気で、熱心ですなあ。」

なまりの多い言葉を聞いて、ほっとした。さあ、録音をしなければ。準備、準備。

「んなむあ。みだ○ んなむあ。んがあみだぶ。つんな

むあん。はあんはああみだ○ んなむああんはああみだ。

○ んなむ ああは はああみだ○」

「あげねんぶづ」が始まると、今まで寝ていた信者たちは、てんでに賽銭を持って、行者の前に集り、一人の扇子上に置き、金剛杖につけた御幣のような切紙をもらって行く。頭にまけば、頭痛がしないそうだ。

「ありがたし しんによのちぎも あどかどぐ くほんじやうどの みでらなりけり(寺)

「さがりなる はなのいろかも いよまして くさきもうかぶ みだのごぐらぐ(花)

「あさからじ こふのけむりの たづのぼる とそづてん
まで にをいゆぐらん」(香籠)

「やみづよの ほどげのひかり ありあげに ちぎもろと
もに にしにこそゆぐ(燈明)

「みづすばし こふりとなりて むうべとも とげてのみ
づは まだものとみづ(水)

次々と休みなく詠われて行く。なまりをそのままに、堂々と詠って行く。そこには、昔の人たちの信仰の告白が含まれていくように思われる。現在では喜怒哀楽を現わさない、無表情に近い姿であるが、以前はもっと感情の通ったものだったことだろう。聞いていたのでは、母音を長く延ばして詠うので、意味ははっきりわからず、その上、僕など東京生まれの者には東北特有の発音で、耳からでは内容はつかみにくい。しかし、山中の、静かな夜中に聞くと、永年伝承されて来た重さを感じざるをえない。メロデーも哀調を含んだものである。

以上のものが終ると、テンポは急に早くなり、

「ぐわんにしくどく ふぎふを一つさい がとうよしうじ
やう かいぐじよう ぶつどう」

「どんなむ。ああん。 はあん はああみだ○ んなむあ

ああんはああみだ○ んなむああ あんはああみだ○ (三遍がえし)と詠われてから、「懺悔文」「開経偶」「般若心経」「舍利礼文」「念仏」と、たてづづけに唱えて終る。

行者の老人、堀川与則さんと久しぶりに談笑したが、次のようにいわれたのは、現在の状態を考えると力強く感じた。

「おれの体が続くかぎり、山へ登ります。お客がなくても上って来ますよ」

まだまだ、東北地方には、古いものが、方言で、素朴な形で伝承されている。ここに、信仰の姿があるのだが、消えそうになっている現状を見ると、心さびしくなるが、これも時代のしからしめるものか？



アメリカに於ける開教師を終えて



…ロスアンゼルス浄土別院…

前ロスアンゼルス
浄土別院布教師

伊藤正穂

一九五九年六月、北米浄土宗別院開教使として羅府（ロスアンゼルス）の別院に赴任して以来八年有余の歳月は、文字通り、夢の如く過ぎ去った。今から記憶を辿りつつ、思い出すままに開教使生活を通じて学んだ。幾つかを記して見たいと思う。

この浄土宗別院は、現在的主監、野崎靈海師の発起に依り、戦後の一九五〇年に買い求められたものである。現在価額約五十万弗と想定される。建物はその昔ユダヤ教の教会として建てられたもので、窓にはユダヤ教会独特の色彩豊かなガラスが使われている。建物それ自体もかなりしつかりと作られている。その後、キリスト教の一派であるメソジスト教団が使用し、現在仏教徒のものとなった次第である。教会自身もインターナショナルな性格を持つて居る。アメリカならではの見られぬ歴史で

あろう。位置は大羅府市の西南区に属する所で、嘗てはユダヤ系の金持が居たと云われるアダムズ街の近くにある。現在は黒人が多いが日系人もかなり居て、第二の日本人町も近くにある。この教会は私の在任中かなりの発展を遂げた。まず第一に上げられるのは内陣の改造である。一九六二年、法然上人七百五十年の御遠忌を記念して、今迄のキリスト教的内陣を大改造して、明かい内陣となった。明るい内陣に関連する事だが日本の寺院建築では、概して内陣が暗い。これは暗くする事によって莊嚴味を出そうとするものであろうが、この莊嚴は、現代感覚から行くと、暗い感じ、即ち陰うつな感じの方が一般には強く受け、この事は「お寺は暗い」という一般的な声となって表われる原因でもある。内陣を明るくする事は、勿論、ビカビカした金箔を張りつめて、光を出す事ではない。この事が行き過ぎると、落ちつきがなくなり、却って浅薄なものになってしまう。適度の明るさは、仏の明るさであり、それは未来への明るさ、理想の明るさ、平和の明るさを象徴するものである。これは明るい永遠の世界に生

きて行く仏教の象徴でもある。もう一つ内陣乃至仏（本尊）を明るくする事は参詣する人々の注意を仏に集注させる心理的效果がある。（これは一般ステージで用いられる照明の効果と理論的には似ている）今後の寺院建築では近代的センスと技術をどんどん取り入れ明るい有効な寺院（劇場ではない）とすべきではないかと思う。

さて、別院の内陣改造には青少年会會員の何日かに亘つての貴重な奉仕があった。この奉仕があったればこそ大事業もなされた。この時に日本から本尊阿弥陀如来の大きな御厨子が購入された。この厨子は現在羅府市にある各宗寺院のどれよりも立派なもので、恐らく日本でもこれ程立派なものは少ないだろう。この本尊阿弥陀如来について一言つけ加えて置こう。これはかなり古い鎌倉時代のもではないかと思われる。目は入目になっている事は美術史の上でも注目すべき事だろう。体内には血で書かれた阿弥陀經一卷が納められている。これは日本人ならぬドクターガダルドという一白人により寄贈されたものである。

この御遺忌を機として内陣は一変したが、その後両大師にも御厨子が入り、更に鎌倉大仏高德院佐藤密雄師の御好意により、善光寺型の三尊が贈られ、別院の内陣を一段と立派なものにした。

内陣ステージには、檀信徒から寄贈された植木があり、その緑は、区画化されたステージに軟かい雰囲気を与えるものと私には感ぜられた。これは他宗の別院では見られない所で、特に結婚式の折には、それが装飾的働きさえするものである。緑の木がどういう意味があるかは、自然に恵まれた日本の生活では少々理解しにくいかも知れない。理路整然として直線的な米国、特に羅府市の生活に入つた時の第一印象を述べて見よう。

羅府市の町は実にきれいだ。シャツでも靴でも汚れない。毎日、大きな掃除車で街路を洗っているからであらう。八年振りに帰つた日本では、埃^埃ばく、雑然とした感じを強く受けた。さてこの街に立ち並ぶ家は色々な色のペンキが塗られ、直線的な家が多く、又原色に近い色で塗られたものもあって、こうした視覚から来る異質的なものに、最初の中

はひどく疲れを覚えた。（一体、この色の感覚は何に依つて異なるのであらうか、民族か、現代か、個人か）各家の前には、芝生ローンがある。私にはこの芝生のグリーンが直線的な家とベイントの色からくるドライな感じを軟らげてくれた。広い公園の木蔭、芝生の上で、しばし腰をおろす事は、心を休める貴重な瞬間でもある。もう一つ感じた事は私の如き、田園に育つたものには、朝起きて夜寝るまで、靴を脱がず、コンクリートの上ばかり歩いている事は、大きな疲労を持たらずのものであり、足にもママが出来たりすると素足で土が踏んで見なくなる。

米国の生活を通じて云える事は、ここは作られた世界であり、自然は崩され、人間の物質生活をより豊かにしようという人工的な世界である。これは近代文明、西洋、機械文明の一特色であらう。日本は、まだ自然に親しむという事が出来る。大部崩されかけてはいるが、この事は人間の心に潤いを与える。家一つを見ても自然の木目が出て居り、屋根の軟かい曲線は、女性のそれとは異つたものを与える。尤も最近考える事だが米国の家の様に

ペンキ一つで美しさを廻らす事が出来る事は素人の日曜大工でも出来ることであるが、日本の家屋では、壁一つ塗り代えるにも職人を頼まなければならぬ事は、甚だ不便な事である。又自然の木目は良いが、それは又、汚れて見られない場合もある。話は大部横道にそれたが、人工的でない自然の姿、それは一本の緑の木も含めて、人間の心的生活に大きな意味がある様に思う。

次に別院の歴史の中で大きな飛躍は、一九六七年春、その拡張事業に成功した事である。即ち、土地建の購入である。米国でも、土地の価格は上がる一方、寺のある通りは、ロット三万弗というのが相場である。寧ろしいのは山々だが仲々手が出せない。しかし、今回、檀信徒、開教使の努力によって長い間の懸案であったこの事業が実現した。発展途上にある別院として大きな喜びである。今日日本でも土地の値段が上がり、お寺も少なからず影響されている。しかし、日本の寺と米国のそれとは大きな違いがある。日本の寺院では、土地を売っている。海の向うでは、土地を買っている。一体これは何を物語っている

のだろうか。

この新購入地にある建物を修理改善し、前方にあるものを日曜学校、日本学校に使用し、後方の建物を開教使住宅に使用している。この整備が一段落ついたので、私は開教使を辞任し、帰国したわけである。これからの開教使は、私の如く、四畳半程度の部屋とは、異なり、広々とした住宅があるので、もっと落ちついた生活が出来るよう。

この別院には、何人かの開教使が駐在した。しかし、八年以上も続いたのは、居ないそうだと聞いている。別院を経済的な面から見れば、その点理解出来る。私は、過去の誰よりもよい時に当たったのかも知れない。だが現在でも待遇問題では、他宗のそれに比べて大遅れしている。

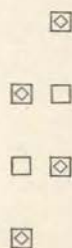
私が在任中には、又何人かの人が一時滞し我々を手伝ってくれた。例えば、元布哇の開教使であった香月正雄氏、クレアモント大学に留学していた生野善成氏、そして現在ホルル別院で英語開教使として、活躍している。河合了勝師等である。特に河合師は、奥さんと共に、三年程当別院で日校の手伝いを

して頂き、私にとってもよき相談相手であった。別院には野崎主監の令息、リチャード・雲法君が居り、目下南加大学歯学部に進んで居るが一昨年当りから日校やら、英語礼拝を手伝っていてくれる。お父さんに似て、弁達者である。彼は純二世（三世？）でまだ日本に來た事はないが、かなり日本語も上手である。しかし、別院の中軸は、野崎師と私であった。

この寺は、野崎師が単身で始められたもので、浄土宗当局からは、創立に当って基金も出ていない。（本来ならば、外地に別院が建てられる場合所定の基金が出るはずだが）。文字通り、飲まず、食わずで建てられたものである。しかも、これは浄土宗の財産となっていると聞く。これまで献身的にされている先生に対して浄土宗当局の態度、政策には、三省の余地がある。長い間、異国の地にあって、浄土宗の為に心血を注いで居られる先生に、三年に一度か、五年に一度位は、実費で祖国日本を訪問して頂く位の心使いがあってもよいのではないかと思う。

林 彦 明 著

「五重大会勸誠講録」



この本は、昭和十五年五月十五日から七日間大本山増上寺において、開山西譽上人の五
百回遠忌の記念として開催された大五重の時
の勸誠師であった林彦明大僧正の講録であ
り、当初増上寺より出版されたものの再刊
で、林大僧正の二十三回忌に当って、刊行さ
れたものである。

林大僧正は、学行ともにすぐれた浄土宗の
偉材であったことは、周知のことであるが、
特に浄土宗学については、仏法において最も
重要な三巻七書の校合解題を出版し、更には
授菩薩戒儀も校合出版するなど、その道の権
威として、大いに活躍せられたのであった。
この書は、そうした大僧正が、その蘊蓄を
傾けて講義せられたものを、宝田正道氏が中
心となって、筆録整理されたものである。林
僧正はその講義に当り、

「今回の場合は、新受者など全然なく、所

謂能化たる古受者のみであって、而もその
多くが謂わば一宗の耆宿であり、長老であ
り、乃至要職にある人々、即ち、当然証明
師たるべき地位の方々ばかりである。従っ
て其等の人々を所受の機根として勸誠する
私は、まことに潜越の至りで、深くその任
に非ざるを愧ずる次第であるが、恐らくか
かることは、空前絶後というべきであろ
う」
と述べ、この大五重の意義の大きさを認める
と共に、その決意の並たでないことを述べら
れている。

序文を寄せられている浄土門主、岸信宏上
人も、この大五重に参加せられた一人で、班
長として、これに参じた感激を述べ、その
経緯を明らかにして、

「それからもすでに二十八年の歳月が流
れ、右にあげた諸大徳も皆故人となられ、

感慨まことに深いものがある」
と述懐されている。しかし、こうした講録は
絶版となり、なかなか見得ぬ貴重なもので
あっただけに、その再刊は誠に意義深いと言
わねばならない。

本書は第一章で伝法沿革が詳述され、第二
章で本論として伝書解題が為され、初重より
五重にいたる伝書が、その内容を紹介される
と共に、その肝要な点が一々指摘されて、伝
法の重要な秘伝にまで及んでいる。大五重の
性格からして、浄土宗伝法の奥義を伝えるも
ので、一般的な五重解説書ではない。従っ
て、極めて高度なものであるが、それだけに
浄土宗にとってはかけがえのない重要性を持
っているものである。

浄土宗侶として、こうした伝統的なものが
と角、忘れ去られ勝ちなこの頃、この書の出
版を見たことは、誠に意義深いものと言わね
ばならない。ちなみにこの書の再刊は、林大
僧正の門弟の一人、岸寛勇師の努力により、
岸門主よりその底本を借用して刊行されたも
ので、大僧正の寺坊、沼津乗運寺の林輝彦師
がその発願人となっている。（編集部）



四苦八苦 — その七

息子の出家（愛別離）

渋谷 賢 応

お釈迦さまが大勢の弟子たちとともに、チ
ユウラコツタヒタカと言う村を托鉢し、シマ
サバナ園に至り説法したときのことです。
この村の人々は、今をときめくお釈迦さまの
説法を聞きもらさじと家中の家族眷属を引き
つれてこの園に集まりました。そして法を聞
き、感激し、渴仰し、歡喜して去って行きま
した。

ところが、大衆の去ったあとに、一人、ラ
ッターバーラスッタ長者の息子が座より起た
ず、皆の起ち去るを見てお釈迦さまの前に進
み出て次のように訴えたのです。

「釈尊よ、今のみ教に感激してそのように清
く生きぬきたいと思いますが、もし私が家に
在れば種々のわずらわしさになやまされ、煩

のために閉ざされて清浄なる行いを貫くことは
できません。世尊、どうぞ私を憐れんでお弟
子にして下さい。仏弟子として世尊に従い修
行したいと思ひます」

お釈迦さまは慈れみつつお答えになりました。
た。

「あなたの父母はそれを許して下さるのです
か」

「父母は許しては下さらないでしょう」

「父母のお許しにならぬ子供を、私は弟子に
することはできません」

「世尊、私はどのようにしても父母のお許
しを願う決意です。何とぞお願い申し上げま
す」

「そうですか、あなたの思うようにしたいら

いでしょう」

ラッターバーラスッタの息子は、お釈迦さま
に挨拶をすませるとただちに家に帰り、父母
の前に自分の決意をつげたのです。突然の息
子の出家の申し出に、その父母の驚きはどん
なであったことでしょう。

「お前は私たちのたった一人きりの子供なの
です。極めて愛していて、私たちはお前を見
ているだけで安心し楽しんできたのですよ。

もしもお前が命がなくなっても私たちはお前
を捨てるようなことはできないでしょう。ま
して命ある元気なお前を……」

と訴えるように泣き伏すのです。しかし息子
は父母の言うことに耳もかかず、ただ自分
が仏弟子になることを言い張るのです。二度

三度言い張っても聞き入れられないのを知った息子はついに地に伏し、飲まず食わず、完全に断食の行に入ってしまったのです。よわりはたつた両親は親戚を集めて論してもらいます。お釈迦さまの境界になると言うことは至難中の難事だと説得してもらいますが息子は聞き入れようとしません。そこで今度はその友達を集めて説得してもらいましたが功を奏することはできませんでした。友達は両親の所に行つて申しました。

「彼はもうわれわれの言うことなど聞こうとはしません。どうです彼の言うことを許してやってみたら。もしそれが許されればまた会うこともできるでしょう。今もし彼の言うことを聞き入れなければ、彼はきつと飢えて死んでしまうと思うのです」

ここに至つてその父母もついに折れ、その代り、学道成つた晩には再び帰つて父母に会うことを約して入道を許すのです。

許されたラッタパーラスッタの息子はひたすら仏道にはげます。苦節十年ついに道成つてアラカン果を得た息子はお釈迦さまに入道のときの父母との約束をつげて再びチュラ

ユッタヒタカの故郷を訪ねることの許を請います。お釈迦さまはもう彼が退転しないことを見ぬかれて彼を許します。彼は勇んで故郷に帰り、故郷の村を扞鉢し、ついになつかしい我が家の門前に立ちました。父は奥の間に髪の手入れをしていましたが、僧の門前に現れたのを見て大声でどなります。「このたわけ坊主、俺はな、俺は目に入れても痛くないような独りっ子を坊主にさらわれたんだぞ、早くそこを立ち去れ、貴様に食わせるようなものは何一つないわい」

彼は何一つ言わず、言われるままにそこを立ち去ろうとしますと、その家婢が腐った食物を糞の中に捨てようとしているのを見ましたのでこう尋ねました。

「もうし、それを糞中に捨てるのでしたら私の鉢の中に捨てては下さらんか」

婢はそれを聞いて彼の鉢の中に食物を入れるとき、かつての若主人であつたことに気づくのです。跳んで帰つてそのことを主人に告げます。主人は大急ぎで衣と食を持って息子を追い、追いついて見ると彼は壁に向つて腐った食物を食べている所でした。

「悪かった。私が悪かった。どうか私の家までもどつてもらいたい」

家にもどると家ではもう大さわぎ、母は全財産を中庭に集め、家内たちはきらびやかな衣服をまとい彼を迎えるのです。そして元の家業を継いでもらいたいと哀願するのですが彼は聞こうとせず、かえつてこの世にたのみになると思つているものは実ははかないものであり、この世の人々はそのはかないものに對する愛着のために走り使われているのだと説いて聞かせるのです。(中阿含 一三二 賴吒和羅經)



この経を拝読するとき、親子の愛情、夫婦の愛情より、なお強かつたお釈迦さまの説法と人格の魅力に驚歎せずにはおられません。そして一子を失う親の情、愛するものと別れる者のせつない苦しみの哀れさを感激深く味わせていただくと同時に浮世の樂しみと眞報土淨土の樂しみの浅さ深さを、目のあたりお示し下さつて余す所なしと思うのでございます。

本人の愛の欠除



自分を愛せ

「戦後に強く感じたことですが、親の子に對する愛情の喪失が、恐れていたように日を経るにしたがつて段々激しくなり、とうとう自分の子を空家にとじこめて餓凍死させる父親が出てしまいました。「教育ママ」というものを嘲笑しながら、そうした母親たちの過度の教育熱心が、実は子に對する愛情の上に立つものではなく、我欲の激しいあらわれにすぎないことは、多くの社会評論家が見ぬけないことだと思います。このごろの若いものは親孝行とは何であるかを知らないとい慨嘆する父や母は、その前に、果して自分が本当に子を愛しているか

を反省しなくてはなりませんまい。

親子間の愛の欠除がやがて社会における和合の喪失に発展し、こんなことではお説きになる地獄が現実化するのも遠くはございませんでしょう。いやもう、子供の餓死放任としてすでに現実になっております。

なぜ、愛の根本ともいべき子に對する、そしてその反作用として親に對する愛がこのようになくなったのでございましょう。そうしたことについてお話を交し、その原因をつきとめ、私の立場からも少しでも貢獻したいものだ、よく考えたことではございました。……」

わたしは電気することに詳しくないので、あるいはまちがった比喩になるかも知れませんが、愛には二つのかたちがあると思います。一つは電気という交流であり、プラスとマイナスとが一体になって流れるものです。他はいわゆる直流で、プラスの極からマイナスの極に一方的に流れるものです。愛の場合、ふつういわれる愛はいわば交流の愛といえます。あなたがいわれているように、子に對する愛が反作用して親孝行になるといったかたちです。若い男女の愛も、「愛することは愛されること」という気持ちをもととしているようです。ですから、ひとたび自分の愛が裏切られると、それははげしい憎しみにかわるのです。

もう一つの愛はこれとはちがって、なんの反作用も、なんの応答も必要としない、純粹に一方的な愛なのです。電気といえば直流です。わたしの知人に女優の草笛光子さんがいます。この草笛さんを赤坊のうちからかあいがって育てたのがおばあさんでした。寒中などは「さむかろう」といって、自分が裸にな

って草笛さんを肌におぶって暖めたということです。このおばあさんが逝ったとき、草笛さんはそれこそ真そこから悲嘆にくれておりました。彼女の目からとめどなく涙が流れました。わたしはその涙をこよなく美しいものだと思いました。

また、こういう話をききました。明治初期のえらい坊さんが、まだ子供のとき、親の手をはなれて、修行に出かけようとしたとき、お母さんの前に手をついて、「お母さん、えらくなつて帰って来ます」とあいさつしました。それに応えたお母さんの言葉は少しかわっておいりました。

「えらくなつたら帰って来なくてもいい。えらくなれなかったときには、帰っておいで」というのでした。

わたしは、こうした愛のかたちこそ本当の愛ではないかと思うのです。愛されたいから愛するとか、なにかのむくいがあるから愛するといったかたちではなしに、なんの報償もおかえしも期待することなしに、一ずにそそぎかける愛こそ本当の愛ではないでしょう。

キリスト教では、愛についてよくエロスとアガペということをいいます。仏教でいうとエロスは執愛ということになります。愛する相手をおのれのものにしたい。あるいは愛する相手にこだわる愛です。——これがふつうにいわれる愛なのです。アガペはしいて訳せば神愛とでも申しましょうか、仏教でいう慈悲にあたります。太陽がさんさんと万物の上にめぐみの光をそそぐ姿がこれであります。

この愛は無限であります。またあらゆるものにそそがれます。したがって、この愛は無限です。洒落^どすることはありません。わが子に対して、幼いときだけで大きくなつたらやまってしまうとか、特定の人だけにそそぐとかといったものではありません。

このようなかたちの愛は、したがってその人の全人格からあふれ出るものです。愛さずにはいられないものです。わたしはこれを書きながら、尾崎秀実が獄中からわが妻子にあてた書簡集「愛情はふる星のごとくに」を思い出しております。愛情を惜しみなくそそぎかけるその姿がアリアリと感じられました。

そして同時に、その人がらの美しさ、崇高さ

に打たれました。

こうしたことで、はたして満足いただけるかどうかわかりませんが、わたくしが申し上げたいことは、現在の日本人の愛情の欠除は、つきつめていうと、日本人自身みずからを愛していないからだと思っています。自分自身を本心に愛し、自分というものを正しい意味で大切にすること、これがいま一番必要なことなのではないでしょうか。自分を真実に愛し、本心に大切にする人は、かならずその人からも豊かになり、その豊かさはやがて溢れ出て多くの人々の上にそそがれることになります。丁度、山間のダムが諸流を集めて、はるか平野をうるおすに似ております。

自分を大切に、自分を愛するというこの意味なり、仕方について深く知らないのでしたら、仏教について、その教えを理解されることがのぞましいと存じます。

（冒頭にかかげた手紙は東京白山浄苑の鈴木俊喜師へ寄せられた檀家の方のものであるが、これを誌上を拝借して現代日本人の愛情の欠除ということについて考えてみたものである。こうした形のコンサルタントを歓迎しますからドシドシお寄せ下さい）

担当者・竹中

小川 金 英

(岩手花巻・松庵寺住職)

日々これ好日

わが国文化の進展速度のはやさは世界に類例がないほどのめざましいものだといわれていますが、偶々曆を開いてみますと、宇宙時代の今日未だ、赤口・先勝・友引・先負・仏滅・大安の六つが配列されていて、友引に葬式を行なうと死者がつづくとか、お祝は大安でなければならぬなど、このほか二八宿・十二建・九星等が配当され、それぞれ吉凶を記してあり、そのどれかに凶があつて、仲々吉日が少ないのです。陰陽説の知識に乏しい私

が、直ちにこれをとやかく評することは差控えますが、今日も依然としてこの様な制約にこだわりの窮屈な生活をおくっている人の案外多いのに驚きます。文化の低い大昔のことならいざ知らず、高度な文化社会に星と交流

しようと取組んでいる現代人として、このようなどるにたりない旧慣に追いまわされ、ふりまわされている事は笑止の沙汰でないでしょうか。

仏教は吉凶禍福、星宿等の占相にとらわれぬことにしています。即ち方角も、年廻りも吉凶日もいけません。日々好日、所在道場、と申さるる如く、来る日も来る日も「今日はよい日だ」と受取れと教えています。今日好日ならずして何日好日が来るでしょうか。今日こそ人生最尊の一日であつて、この日より他に行取すべき、当てになる日がないぞと教えているのが仏教であります。

もちろん私共の一寸先は闇であり、前途は誰も確約も予測もできません。不安とでも申

しましょう。だから祈らずには、願わずにはいられない私であります。即ち来る年はさてどんな年になるのか不安なのです。だからこそ、元朝詣りもするのです。家内安全、商売繁栄、交通安全と加護を願うのは無理からぬ事です。しかし思つてみると今日まで否今こうしていることは何一つ私の力だけで生きているのではなく、お互人間社会のいろいろなお力によることはもちろんながら、目に見えない、気のつかない大きなお育ての中に呼吸をし、生活させていただいていゝのではないのでしょうか。

大きな力はすべてのものに「よかれかし」と生かしめ玉うているにもかかわらず、それにさからうような私の日常にありながら、明

日の吉凶を占ったり、運勢にのみ心をまどわして、尊い与えられた今日の一日を空しくしては勿体なく、仏光照耀の中に、方角がどうの、年廻りはどうのとためらっている愚かさから脱して、今日を尊い日、よき日と受取っていくことこそ大切な事ではないでしょうか。

過ぎてきた日にもあったように、これから病む日もあるかも知れません。困ったと思うこともないといえますまい。雨の日も風の日もありましょう。しかし病んだことも、厄にあったことも、今になって決して損だけではなかったはずで、雨の日は雨の日なりに、風の日も風の日なりに、よい日にうけとれるのです。

昨秋台風銀座といわれている九州はかつてない旱魃で農作物はもちろん、飲用水にもこと欠く程でしたが、その折はあの大被害におのいた暴風雨ですら、来てくれたらと願ったといえます。いやな台風すら大事なものであることを知ったということです。

越後の良寛さまが「雨の日は雨がよく候、

病の時は病むがよく候」と申されたといいますが解る氣持がいたしませんか。

ナムアミダ仏のお念仏の元祖法然さまは、天災地変に加えて戦乱のちまたに親子兄弟相食む、全く頼りにならぬ当てにならぬ社会の不安相の時代に、加持祈禱か隠遁か奇蹟を期待していた仏教の中から、学問も戒律も打捨て、ただその身のままで、階級も差別もへだてず平等に救われて、生かされる弥陀の本願力を信じ、単信口称のナムアミダ仏を称えることによって、喜び生かされる安心の一日を教えて下さいました。即ち与えられた、恵まれた今日をナムアミダ仏と受取る法悦の生活を開顯して下さいました。どの日もどの日も好日で、凶日ではないのです。み仏の光りに包まれた今日なのです。

さえられぬ光もあるをおしなべて

へだてがはなる朝霞かな

の法然上人のお歌そのものののです。

ふところの中とも知らでおさな児は

生死の夢にうなされにけり

大いなる慈愛の胸に、いだかれていながら

夢にうなされたり、駄々をこねたりしている私達なのであります。

み仏はいつでも、どこでも、誰れでも、どんな事の上にも、お育ての力（本願力）がかけていらるのですから、今、ここで、私が、この事を通して働きたもうみ力を喜び、日々是れ好日の日暮しこそ真に生きがいある尊い人生でありましょう。

時は今とて足もとそのことに

打ち込む命永久のみのち

なのです。いたずらに、過去を追う生活でもなく、只未来のみにあてがわれる生活でもなく、過去未来を貫ぬく今日こそ尊い正しい生活だと存じます。

古人の歌に

この秋は雨か風か知らねども

今日もつとめに田草取るなり

といわれましたが、さらに

この秋は雨か風か知らねども

みだに喜び田草取るなり

と、ナムアミダ仏の念仏裡に楽しい、そして尊い一日をすごそうではありせんか。

仏像の心を聞く



一ノ瀬路夫

○ 最近仏像に対する鑑賞がさかんである。いったい仏教の美術をみると、わたしたちの生活との間に、どういう関係があるのだろうか。

そこには、まず、わたしたちの心を美化するということ、また、わたしたちの心に快感をあたえ、慰安をあたえるということもある。

ところが、宗教の美術のもつ特性は、わたしたちの生きるための精神的なあゆみ方を教えるという点にあるということである。

このことを注意して、仏像などの仏教美術を観る必要がある。

仏教において、「聞く」ということが、大

切な態度とされているが、仏法を聞くということは、仏教にふれてゆく根本的な態度である。

そこで、聞くということは、普通の場合、相手の語る言葉を聞くのであって、声というもの、縁となつて、相手の説く心を、こちらへ受けとることになるのである。ところが仏教では、もうひとつ、音や声ではなくして形というものから聞くということが説かれるのである。形というものには、音も声もない。それなら、どうして、聞くことができるかというと、その形というものは、ある心、精神をあらわしているものであるから、その形を縁として、その精神を聞くのであるとい

これは、たいへん意味深いことである。ところが、こういうことは、あなたがち仏教に限らず、一般の生活においても、いうことができるとおもう。たとえば、深夜に枕をけられて、おどろいて眼をさますと、そこに覆面した屈強な男が、兇器をもつて、立っているとする、気の弱い人は、ふるえあがつてしまう。それは、その形から、その人間の心聞きうけたのである。また、発病した娘が床についており、真夜中にふと眼をさますと、寝もやらず、枕もとに座っていた母が、手を合せて自分をおがんでいるのを見たとする。すると娘の両眼からは熱い涙が、にじみでてくる。これは、どうかよくなるようにと、念ずる母の心を、その合掌している形、

すがたから、うけとり感じ聞いたのである。

ここに、形から聞くということが出来るのである。

仏像をみる場合に、とくにこのことが大切である。仏像のみでなく、およそ仏教の美術は、形のない真理、わたしたちの生き方が、美しい形によって、あらわされているのである。それを、美術の心といってもよい。その心を、自分の生きる態度、あゆみ方として、うけとり聞くのである。ここに、その形の美しさというものが、その使命をはたすことになるのである。

奈良の法華堂は、三月堂とよばれて、よく知られているが、本尊は、天平時代そのままの美を現在に伝えている、不空羅索観音である。頭上の冠には、阿弥陀仏を頂戴し、胸に合掌して立っている聖容は、単なる美的鑑賞の対象でもなければ、現世の物質的利益のみを願う対象でもなく、わたしたちが、生きてゆく構えを照示しておられるような気がする。

頂戴とは、頭にいただくということであ

る。客となって、他人の家をおとすれ、茶菓の接待をうけたとき、「いただきます」「ちようだいいたします」というが、言った以上は、それを、ひたいたるところまであげねばならないのである。なぜかというところ、その茶菓には、それを出した人の心がこもっており、その心をうけとるのであって、それからそれを飲み食すのである。

頂戴するということは、相手の心を受けることである。いま不空羅索観音が、冠に、阿弥陀仏像をいただいているのは、阿弥陀仏の心を、自分の心としてゆく無我の心を象徴しているのである。胸にあてた静かな合掌はわれよりも高き仏の心を受けとり、それをよりどころとして生きることを示すのである。

わたしたちは、この観音の聖容が照示する心を、天平の古き掌の中から、今日を生きる現実の生活の中に、勧請、迎えたいのである。観音は、仏教的な自己教養を育てあげたひとつの境域にある存在である。自己の教養を否定して、より高き仏の心に於て生きることを示している。

よく走ることを形容して、偉駄天のようだという。よこしまなものを打ちくたく金剛杵を合掌の手に捧持して、疾走する形に作られているこの像には、今日のわたしたちが、聞くべき生活態度が明らかにされている。

仏教の經典には人間の心の暗が破れ明るく美しく生きる道が説かれている。このことは暗をこのみ、人間を罪惡にさそう惡魔にとつては、まことに都合なものである。そこで、一人の惡魔が、經藏に忍びこんで、經卷を盗み逃走したが、偉駄天に発見され、逃げるものと、追うものとの、すさまじい状況が展開されたのであるが、駆けるに妙をえた惡魔も、偉駄天の足にはかなわず、ついに経卷が無事もとにかえた、というのである。

この説かれた幻想が、真理を護るろうとする心構えをおしえるのである。自分のことだけ考えて、生きていく現代の、わたしたちの生活の中で、常にこの道を把握し、それを護り、そのためには、走りまわる心、偉駄天の心を、再考する必要がある。わたしたちは、もう一度、仏像の心聞き、味い、かみしめてみることの大切さを、しみじみと思う。

和 訳 三 部 經

無 量 寿 經 (一)

菩薩のあるべき姿

—經の序説—

村 瀬 秀 雄



一、菩薩の生誕と入滅

仏、無量寿經を説きたもう。卷上

私（阿難）はこのような教えを聞いた。

ある時、釈尊は王舎城の東北に聳える靈鷲山におられた。お側には一万二千人の勝れたお弟子たちがいた。彼等はいずれも神通力をもった聖者たちばかりであった。中でも①大迦葉尊者、②舍利弗尊者、③大目連尊者④羅睺羅尊者、⑤阿難尊者を初めとして、教団の上席をしめる三十一人の聖者たちがいた。

註

①大迦葉は十大弟子の一人。富豪の家に生れたが、財を捨て、修行第一といわれた。

②舍利弗は十大弟子の一人。智慧第一といわれ、羅睺羅の師であった。

③大目連は十大弟子の一人。神通第一といわれ、餓鬼道に苦しむ母を救った。

④羅睺羅は十大弟子の一人。釈尊の子として生れ、密行第一といわれた。

⑤阿難は十大弟子の一人。釈尊の従弟にあたり、多聞第一といわれた。

またそこには多くの菩薩たちも同席していた。中には釈尊の脇士であって慈悲の普賢、智慧の文殊の両菩薩を初めとして、未来に出世せられる弥勒菩薩、在家の菩薩、出家の菩薩等いろいろな菩薩がいた。しかしどの菩薩たちもいずれは如来となるための功徳を成就しようとして、大願をおこし修行を積んでいく菩薩ばかりであった。

つまりこの菩薩たちは、仏の教えの中に身も心もち込んで、十方の国々に行っては相手に応じた方法を以て人々を教化していた。そしてこの世界にあっても仏の悟りと同じ悟りの境地にまで達していた。こうした菩薩について、その出生から記せば次の通りであった。

菩薩はかねて兜率天にあり、そこで正法を宣布していたが、やがてその天界を捨てて人間の母胎に降下した。月満ちて菩薩は母胎から生れると、直ちに七歩を歩み、「われはまさに、この世において無上尊となるであらう」といった。その身は光明に輝いて十方の世界を照した。この誕生を祝って諸仏の国土は六種に震動した。帝釈天と梵天はこの新生

を守り、天と人はみなこの新生を祝福した。

菩薩は長ずるに従って算数を習い、文芸を学んだ。弓を射ること馬を禦することを覚え、仙人の術を修め、書籍を読んでその奥義を究めた。また王宮の後園において武芸に励んだ。やがて王妃を迎えて家庭生活を楽しんだ。

ところが老人と病人と死人とを見てからはこの世の非常さを悟った。そして国と財産と地位とを捨てて山に入り、道を学んだ。王宮から乗ってきた白馬や宝冠、飾りもの一切を従者に与えて王宮に帰らせた。美麗な衣服を脱いで、法服を着した。頭髮を剃って樹下に端坐した。そして苦しい修行を続けること六年の長きに及んだ。

俗世間に生をうけた以上は、普通人と同じく身体の垢をもっているのだから、これを洗い流すために河に入った。沐浴を終って、天人が垂らしてくれた枝につかまり岸にあがった。多くの靈鳥たちは菩薩をとりまき、道場に到るまでつき添った。帝釈天は菩薩の前途を祝って草を刈って施草とした。菩薩は施草を受けて菩提樹の下に敷き、その上に坐して冥想

に入った。

菩薩の身体から大光明が放たれた。これによって悪魔たちは、菩薩が間もなく悟りを開くことを知った。悪魔は眷属を引きつれて来り、菩薩の成道を妨げた。しかし菩薩は智力を以て悪魔を制したので、悪魔はみな降伏した。かくて菩薩は微妙の法を悟って、仏陀となった。

帝釈天と梵天は喜び来って、仏陀に法輪を転ずることを懇請した。

註

1 法輪を転ずるとは仏が法を説くことをいう。法輪聖王の輪が一切の障碍を破って道を開くように、仏の説法が煩惱を破り、邪見を砕いてゆくので、仏の説法を法輪転という。

そこで仏陀は諸方に歩をすすめて獅子吼した。仏の説法は法の鼓をうち、法の貝を吹き鳴らし、法の剣をふるい、法の旗をたて、法の雷をならし、法の電光を放ち、法の雨を注ぐようであって、多くの人々に法を施した。説法するところ、すべての人は悟りに導かれ

た。仏陀の光明はあまねく無量の仏国土を照らし、世界は六種に震動した。この震動は魔界にまで及んだので、悪魔はすべて怖れ帰伏した。このようにして仏陀は邪見の網をひき裂き、外道を滅し、煩惱を散じ、欲望の堀をこわし、法城を守って法門を開き、心の垢を洗って清白にし、広く仏法をひろめて正しい教化を行った。

仏陀は諸国にわたって托鉢し、立派な供養をうけ、功德を貯えて福を与えた。法を説くにあたっては、常に欣笑をたたえ、さまざまの法によって人々を三苦から救った。

註

1 三苦は病氣等の苦しみ（苦苦）ものはすべて破壊する苦しみ（壊苦）すべては流転して常住しないことの苦しみ（行苦）のこと

また仏陀は他の菩薩たちにも無量の菩提心をおこさせ、将来必ず成仏するであろうという予言を授けて悟りに導いた。かくて仏陀は遂に入滅されたが、その間に人々を救済すること極まりなかった。

二、自分のため人のための徳

菩薩たちはもうものの煩惱を消し去って、徳の本源を培い、すべての功徳を備えている。また諸仏の国土に行つてあまねく道を伝え、修するところの行は清浄であつて少しの穢れもない。たとえば幻術師が、人々を救う便法として、ある時は男の姿となり、ある時は女の姿となり、その他いろいろの姿に自分を変えてゆくが、それでいて幻術の道の本は少しも変ることがないのと同じことであつて、菩薩たちは、一切の法を学び、学んだ教えに心を安らかにおちつかせて多くの人々を教化するのである。あらゆる国土において救済するが、そのとき少しの高慢な心がなく、常に優しく慈悲の心をもつて人々に接する。このように救済の法をすべて備え持つてゐる。

また菩薩たちは經典の意味をよく理解している。その名が十方世界に知れわたり、人々を教化している。無量の諸仏は菩薩を守り、菩薩の大導師となつて、ともどもに人々を教化している。そのために一切の世界は汚

のない清い国となつてゆく。

菩薩たちは諸仏を供養し、諸仏の徳をよく身につけている。即ち諸仏は衆生を説法するに當つて畏れるところがなく、一切のものは因縁の和合であつて、一切のものは幻のように本性がないことを悟っている。また諸仏は障害となる悪魔の網を破り、煩惱の繩を解き除いている。また諸仏は声聞、縁覚といった狭い教法から抜け出して空、無相、無願三昧といった道理を悟っている。しかし教化するための方便として、菩薩と縁覚と声聞という三乗の区別を認めて、縁覚や声聞が行なうような入滅という現象を、仏陀もまた現わされている。こうした諸仏の徳を菩薩も身につけているのである。

註

1 声聞は経を読み、法を聞くことによつて悟りを開こうとする人。小乗の人。

2 縁覚は十二因縁の道理を縁として悟りを開こうとする人。中乗の人。

3 空は実体もなく、自性もないこと。諸法は実体なしと観すること。

4 無相は執著を離れた境地のこと。実の体が

なければ実のすがたなしと観すること。

5 無願三昧は欲求の思いを離れた境地のこと。体にも相にも実体がないならば、自分の心にも実体なしと観すること。

6 三乗は声聞（小乗）縁覚（中乗）菩薩（大乘）の三種の人のこと。各々身分に適した教法に乗つて迷界を脱するので三乗という。

菩薩たちはすべては平等であるという道理を会得している。この道理は何んなところの行いもなく、結果として生ずるものもなく、起るものもなく、滅するものもないというのである。菩薩は多くの悪法を捨てて善法を持ち、すべて、三昧にあつて一切の智慧を成就し、その上で人々を教化している。

註

1 三昧は等持ともいい、修行して心を一境と安住せしめ、動かない境地のこと。

そして菩薩たちは一切の經典を説き、深い冥想に入り、現に無量の諸仏がいますことを感得し、一念の間に諸仏の国土を周り、そこ

にいる苦惱の人々、仏道に励むものや、励まぬもの等に対して教えにより救い、真実の道を示すにあたっては、丁度仏のもっている弁才と同じ能力を発揮する。

そのために菩薩たちは諸国の言語を自由に操って、あらゆる国の人々を教化する。世間にあるすべての法を超えて、心は常に迷いの世界から脱することのできる道にいるから、一切万物に対して自由に心のままに処することができ、多くの人々のためには不請の友となつて、こちらから教化に出掛けてゆく。このように菩薩は人々の苦を抜き樂を与えることこそ己が任務であり、自分が引き受ける責任があるとしている。

註

1 不請の友は求められなくてもこちらから進んで真実の友となり、相手を教化すること、大慈悲心の現われである。

菩薩たちは仏の甚深殊勝な教えを堅持し、それによって人々の心の中にある仏性を常に絶えることのないように守り育てている。

註

1 仏性は仏となれる本性のこと。

菩薩たちは慈悲心をおこして人々を隣み、いつくしみの言葉を以て人々に法の眼を開かしめ、迷妄のために落ちる地獄、餓鬼、畜生への道をふさいで、善にいたる門を開き、不請の法を以て人々に施す。こうしたことは親孝行の子供が父母を孝敬するのに似ているし、多くの人々をみるのに、自分自身をみるのと少しも変らないのである。菩薩たちの修行する道はすべて悟りの世界につながっているのである。その結果は諸仏の無量の功德と同じものを得ているのである。その智慧が尊く清らかであることは測り知れないものがある。

註

1 不請の法は求められなくても、こちらから進んで人々に与える真実の法のこと。大慈悲の現れである。

このように勝れた徳を供えている菩薩たちが数えきれない程に沢山にいて、みな靈鷲山に集っていた。

(附記)

經典の序説として菩薩のあるべき姿が詳説されている。初めに菩薩の八相成道(降兜率、入胎、出胎、出家、降魔、成道、転法輪、入涅槃)が説かれ、これは釈尊の八相成道と同じ内容である。そして次には自分のため人のためという自利利他について説かれ、菩薩の徳を明かにしている。

釈尊の教えをよく理解するにはどうしたらよいか。それには釈尊の生涯になるべく近く、その修行をまねることが第一である。そのため釈迦八相を知り、經典を読み、法を聞くことであるが、これは声聞といい、小乗の人といい、この經典では狭見の人として捨てている。

次には教えの内容を学んで修行するのがよいわけであるが、単に道理だけを学ぶものを縁覚といい、同じく狭見の人として捨てている。そこで最後に大乘の人として菩薩が登場し、自利利他の徳がのべられる。自ら修行し、仏を供養し、人々を教化し、不請の友となり、不請の法を与える様子について詳しく説かれている。

児童劇

ピーターとおおかみ



プロフィエフ作品

音楽劇「ピーターとおおかみ」より

脚色 大正大学児童研究部

第一幕

場所はピーターの家の前、門が上手、下手に大小の木が一本ずつある。全体に緑のムードが満ちている。時間は早朝。実に清々しい。小鳥がこのすばらしい朝を表現するように登場し、話し始める。小鳥一が先に来るがステキなので小鳥二を呼ぶ。小鳥一に言われて同じく二がとぶように出てくる。

小鳥一 トララ……朝だわ朝だわ。夜明けのはじまりだわ。青い空に白い雲、何んて気持ちの良い朝なんでしょうね。はやく来てみなさいよ。

小鳥二 トララ……何んてステキなんでしょう。今日も青い空をスイスイ飛び回られるね。

小鳥一と二は無二の親友。おしやべり好きな小鳥である。二羽は楽しくて仕方ない。小鳥の仕事はお空の掃除。毎日いろいろの所へ出かけているが、さて今日はどこまで行くかを相談中。

小鳥一 今日はどこまで行こうかしら。

小鳥二 ボク、海に行ってみないな。

小鳥一 お山のテッペンにしようかしら。

小鳥二 子供達がたくさんいる町にも行ってみたいし……。

小鳥一 お花畑にも行ってみたいし……、ああ最初にどう行こうかしら。

二人は自分の行きたい所を次々と言っているが、最後にどこにしたらよいか迷ってしまう。そこで二人は考えることにした。考えながら二人は下手の方に行き、木のところで思案している。

その時ピーターが早起きして門を開けて出てくる。ピーターは気持ちの良い朝なので、とても楽しそうに元氣よくあいさつ。

ピーター やあ、みなさんおはよう、ボクピーター。どうぞよろしく。

その時、門をしめ忘れてしまう。ピーターはみんなに自己紹介を始める。

ピーター この家にはボクとおじいさんの二人だけで住んでいるんだよ。あのね、おじいさんはまだ寝てるんだ。だからそーっとできたんだ。おはよう、小鳥さん。

言い終って小鳥を見て元気よくあいさつ。

小鳥一 おはようピーター、今日はとても早起きね。

ピーター ウン、早いだろう。小鳥さん達は朝から楽しそうだね。

小鳥一 私達の仕事はお空のお掃除なの。とても楽しいのよ。

ピーターはいつも家に居りつまらないのでどこかへ行きたくて仕方がない。

ピーター ワァー、じゃあ、いろいろな所へ行くんだね。空を飛ぶってすてきだろうな。

ボクも飛んでみたいなあ。

小鳥二 ボクたち、これからどこへ行こうかって相談していたのさ。

ピーター ボクもどこかへ行ってみたいな。そうだ、この森へ行ってみようかな。

森の方を見て、少しこわそうだが探険に行くような気持ちになってくる。でもそこはい

つもおじいさんから行ってはいけないと言われていた所なのである。小鳥はピーター

が言われているのを知っているの、あわてて止めようとする。

小鳥一 この森へは行ってはいけないと、い

つもおじいさんが言っているよ。

ピーター すぐに行けるじゃないか。小鳥、いかにもこわそうに言う。

小鳥一 おおかみがでるんだって。ピーター おおかみだって？

小鳥二 こわいわよ。

おおかみが出る話は聞いたことがあるが、ピーターは強い子なので少しもこわくないそれに森の中に行きたくて仕方がない。

ピーター 平気さ、ボクとおおかみなんかこわくないもん。ボク……強いもん。行ってみようかな……。ちょっとだから行ってくるね。

小鳥たちはあわてて止めようとするが、行ってしまう。

小鳥一 だめよ、ピーター。小鳥たちは少し追いかけるがこわいので、

のぞくだけですぐにもどる。

小鳥二 ピーターだいじょうぶかなあ？ 入れかわりにアヒルがヨチヨチしながら閉

め忘れた門を出てくる。広い所へ出られた喜びでうれしくて仕方ないといった風。

アヒル ガアガア、やっと広い所へ出られたわ。みなさん、おはようさん。

小鳥を見ながらいかにもうるさそうに。

アヒル おやおや、又おしゃべり小鳥が来ている。朝から晩までおしゃべりばかりであき

ないものかね。小鳥一 おはようアヒルさん。こんなに早く

どちらへお出かけ。アヒルはいかにも泳げるといふ気持ちをこめ

アヒル ああ、わたしや池にでも行って、ひと泳ぎしようと思ひましてね。

それに対して、小鳥はアヒルが泳げるなんて初耳だというように言いかえす。

小鳥二 ヘー、アヒルさんは水の上を泳げ

たかなあ？ アヒルと小鳥は言い争いに夢中となる。

アヒル まあ、なんてことを。私しやこの年になってもちゃんとスイスイと泳げるんですよ。全く泳ぐというのは気持ちいいね。

小鳥一 アヒルさんこそ、鳥のくせに空を飛べるの。

小鳥 ボクたちどこへでもとんでいけるよ。アヒル 鳥なのに泳げもしないで。

小鳥一 フン、鳥のくせにとべもしないで。小鳥二 そんなにヨチヨチじゃとべないね。

アヒル いいよいいよわたしやお前さん達みたい
にフラフラしてませんよ。

この時、ネコが門から顔を出してそのやりとりを見ている。ソロリソロリと気付かないように小鳥の方へ忍び足で近付きつも少しでつまずきそうになる。が彼らはけんかに夢中で気付かない。

ネコ オンヤ、小鳥とアヒルが又けんかをやっているようよ。そつーとそつーとあの小鳥達をつかまえるっていいじゃない。小さくてチヨコチヨコとしていて、わたしすぐからかいたくなるくせがあるの。もう少しだ。よし、一・二の三……

ネコがとびつきそうになると下手の方から石がとんできてネコにあたる。

ネコ アイタタ…… ニャンとしたことでしょう。だれ石なんか投げたのは。

アイタタという声に鳥は木の上に、アヒルは少し遠くににげる。

小鳥達 キャー、たすけて！

アヒル ガアガアガア、ウワー逃げろ！

らビーターがあらわれる。

ビーター こら、どうして小鳥をとるんだ。

ネコ アラ、ビーターのようね。これはどうも、ナーニちょっとからかっただけです。

ネコはビーターを見て、これはまずかったという顔をする。でも、すぎがあれば又いたずらしようと、小鳥達の方をうかがっている。小鳥達は自分達がねらわれていたのに気付いてネコのそばに寄ろうとしない。

小鳥一 うそだわ、私達をどうとしたのよアヒル。ネコさんたら、なんていじわるなんでしょうね。

小鳥二 うっかりできないね。用心しないと大変だ。

ビーターはネコにもうしないようにいうがネコは返事だけで再びやりそうな気配。

ビーター もう小鳥さんたちにいじわるするのはやめなよ。

ネコ まあね。どうでしょう仲直りってのは言いながらネコは小鳥に近付くが、小鳥はすぐのがれて近付こうとしない。ネコは木の下で残念そうに小鳥をながめながら、ウロウロする。

小鳥一 わたしはいやだわ。

アヒル 用心、用心。

その時、家の方からおじいさんの声がする。

声のみ

おじいさん ビーター ビーター。

おじいさんの声にビーターよろこぶ。小鳥その他も声のした方に向って親しそうにビーター あっ、おじいさんだ。

小鳥達 おじいさんの声だわ。

おじいさんは門から出てくるが、その顔はおこっている。

おじいさん ビーターどうしてだまって出てきたんだね。あれほどいけなと言ったのに忘れたのか。

おじいさんに言われて、ビーターは悪いと思ったがあまりにもお天気が良いので遊びたかったのである。

ビーター だって、おじいさん、ボク：外で遊びたかったんだよ。

おじいさん あの森にはこわいとおかみが出るんだよ。

でも、おじいさんは森におおかみが出るのを恐れてビーターが外に出ることを許さない。おじいさんの言葉に一同はうなずく。

ピーター でもボク平気さ、おおかみなんかこわくないもん。

でも、ピーターはもうそれをこわがって、じっとしているような小さな子供でもない。それにみんなと一緒にならば、なおさらこわくないと思ひみんなをさそう。

ピーター ネー、みんなも一緒に行こう。

しかし、みんなは顔を横に振るだけ。

おじいさん コラッ。そんなことをしたら、みんなおおかみに食べられてしまうぞ、ピーターがそんなことになったらおじいさんは一人ぼっちになってしまうよ。

ネコ おじいさんのいう通りのようよ。

小鳥二 それにあぶないよ。

みんなの心配をよそにピーターは一緒に森へ行ける楽しさを思いながら一人々々聞いて歩くが、だれも行ってくれる人がいないのでがっかりする。

ピーター 大丈夫だよ。ネエいいでしょう。

みんなも行こうよ。アヒルさんは？

アヒル あたしや、お池で泳ぐことが一番たのしいね。

ピーター ネコくんは？

ネコ わたし……そうね。お昼寝ってところがいいようよ。

小鳥達 私達だってここで遊んでいた方がたのしいわ。

ピーター チニつまんない。誰も行かないなおじいさん ピーター、絶対に行っちゃいけないよ。さあ家にお入り。

ピーター いやだなあ、外で遊びたいんだよ。

おじいさんはピーターを連れて家の中に入れようとするが、ピーターは仲々入りがたらないので強引に連れて入ってしまう。

ネコ おじいさんで行きなさい。

ネコが言った時、一同うなずいて同意する。ピーター、いやいやながらおじいさんに連れられて家の中に入っていく。

おじいさん さあ、早く、早く 早く

ピーター いやだよ、いやだよ、いやだよ

その時、門のカギをかけてしまう。残った者達は、二人の方をしばらくながめていたが、各自の行動を開始する。小鳥一、家の方を見ながら、安心したようにいう。

小鳥一 ピーター、とうとう、お家へ帰って

いったわね。

アヒルは池の方に向って歩きながら、アヒル さて、ひと泳ぎしてきましょうや。

ネコはキョロキョロしながら動き出す。

ネコ わたしは、お昼寝ってところがいいようね。小鳥さん。

ネコは又、小鳥をかまおうとするが、すぐに木の上に逃げられてしまうので、木の上の小鳥をながめている。

すると森の奥の方からなき声と共におおかみが空腹をがまんして、すごみながら出てくる。袋を持っている。

おおかみ ウオー、ウオー何か食べるものはないかな。おなかですいてたまらん。

一同 ウワー。おおかみだ。

一同びっくりして、小鳥は木の上へ。ネコも木の上へ。しかし小鳥とは離れたところに登る。

ネコ ニヤンたること、おおかみのようね。

アヒルだけが下でヨタヨタとかけだす。アヒルは門の中に入ろうとするが閉っていて入れない。

小鳥達 はやく、はやく。(続く)

◆編集後記◆

○梅・桃の花のかおりの中に寒さもようやく和らぎ、鶯の初音もなつかしき頃々ですが、会員の皆様、益々充実した日々をお過ごしのことと存じます。今月は彼岸会を中心に仏教界にも清らかな花を開かせ、心ゆたかな日々を迎えたいものです。

○それにしても昨今の世界情勢はベトナム・朝鮮を中心に混沌とした様相を呈しております。理由はともあれ同じ仏教徒として一日でも早い解決を望み、本当の彼岸に向うことを願わずにはおれません。

○開宗八百年に向って宗内では各種の記念行事・事業を計画中の由、すでに浄土宗辞典の編纂は収録語句のカードの整理の段階に入っております。また大本山増上寺でも大殿新築の計画を練っているとのこと、これを機会に宗内の一大飛躍を皆様と共に押し進めようではありませんか。

○大正大学ではいよいよ新校舎の建築が決定、二月十二日（月）には旧校舎の解体式が行なわれましたが、思い出多い校舎を一目収めようと関東近県の卒業生多数が集まり昔話しにふける光景が多く見られました。本年十月末までには完成する予定とのこと宗門を荷負う若き宗徒の教育の場として、一日も早い完成が待たれるところです。

○過日ある座談会で「ウソとは」という論題の中、日本で一番ウソをつくのは政治家と宗教家であるという意見を出され、全く驚ろかされた。その理由の詳細は多く語られなかったが、人々の相談相手として、模範となるべき宗教家にしてこのような印象を与えるようでは論外である。もう一度心静かに素直に反省せねばと痛切に感じた。

○本誌では本年を会員倍增運動の年とし、計画を実施しつつありますが、文書伝道の重要性が再認識されている昨今、皆様の周囲の方々一人でも多く御紹介いただきたく思っています。

「浄土」講読規定

一部 定価 金六十円

(送料 六円)

会費一カ年 金七二〇円

(送料 不要)

浄土 三月号

昭和十年五月二日

第三種郵便物認可

昭和四十三年二月十五日 印刷

昭和四十三年三月一日 発行

定価 六十円

編集人 宮林 昭彦

発行人 佐藤 密雄

印刷人 関 二三男

印刷所 新光社印刷株式会社

東京都千代田区飯田橋一ノ十一ノ六
発行所 法然上人鎮仰会

電話東京二六二局五九四四番

横濱東京八二一八七番

信仰・教養の手引

松 濤 弘 道 著

現代人の指標

190頁 B6版
定価500円 70円

松 濤 弘 道 著

仏教徒必携

142頁 新書版
定価300円 75円

海外生活11年の著者が世界的視野に立って現代人のために、仏教信仰のあり方と浄土宗信事による人生観の確立を強調。とくに後者はひろく担信徒のための手引書として最適。 10p以上1割引。

図書館協会すいせん図書

創 価 学 会

——その性格と活動——

竹 中 信 常 著

本書は著者が手がけてきた創価学会研究の総まとめで、しかも、現下もつとも問題とされている政界、実業界、労働組合と学会とのふれ合いについて平易に叙述したユニークな著作、本年六月参院選をひかえ、創価学会の性格を知り、その活動方針を見究めるための必読の入門書として図書館協会のすいせんをうけた。

労働法学出版社刊

定価 400 送料 70円

以上本会にて取扱います。

新刊 藤 井 実 応 著

「生きる歩み」

領価 200円 送料 45円

ハガキ通信、15年分をまとめたもの

申込先 愛知県宝飯郡小坂井町伊奈新屋

藤 井 実 応

振替名古屋27462番

最近刊 浄土宗徒待望の好著

佐藤 密雄 著

仏教々団の成立と展開

著者のもつとも得意とする仏教々団の規律と統制の問題を分りやすく概説し、現在の仏教々団の在り方に多大の示唆を与える。

林 靈法 著

仏との出会い

現在仏教界における革新的思想の第一人者たる著者が若き日の苦難と思想遍歴を通じて到達し得た浄土教信仰を余すなく描き尽す。

竹中 信常 著

日本人と仏教

法然上人と念仏信仰とをひろい視野のもとに、現代日本人の思想構造のうえに位置つけた好著

以上いずれも

教育新潮社刊

定価 六〇〇円
送料 七〇円

◎ 当方にてお取次ぎいたします

大正大学

東京都豊島区西巢鴨 4 の 530 電話 (918) 7311

昭和 43 年度学生募集

募集人員 200 名・2, 3 年若干名 大学院修 40 名・博 13 名
カンセリング研究生 (10 名)

出願期日 3 月 2 日～3 月 27 日

試験日 3 月 28・29 日

学部専攻科

仏教学部 仏教学科—仏教学・梵文学・浄土学・天台学・真言学

文学部 文学科—国文学・米英文学

史学科—日本史学

哲学科—西洋哲学・宗教学・中国学

社会学科—社会学・社会事業

大学院文学研究科—仏教学・国文学・宗教学

カンセリング 研究生

男女寄宿舎あり☆詳細は同学庶務課入学案内へ (〒150 円封入)